

今日の福音書の中で、私の心に残る言葉は、冒頭に出て来る「あなたがたは地の塩である。」という言葉です。

塩には、ものを清めるという儀式に使う役割、味をつける調味料としての役割、腐ることを防ぐ防腐剤、保存料としての役割などがあります。福音書の続きに出て来る「世の光」のような、目立った存在ではありませんが、「隠し味」という意味でも、塩は目立たなくても、重要な役割を持っています。

以前、NHKの料理番組を見ていた時、大変大きな結晶をしている塩が出てきました。私はそれと同じものをその放送の少し前に友人からイギリスのおみやげでもらっていました。その料理番組では、そのイギリスの塩をヨーグルトに入れて食べると、とてもさわやかな味がする、という紹介でした。そのテレビを見た次の日曜日は、八幡の教会に行く日だったのですが、私はその塩を持ち、途中のコンビニでプレーンヨーグルトを買って、八幡の人々と食べてみました。そうすると、今まで味わっていた、砂糖などを混ぜたヨーグルトとは違う、新しい味にであったような気持ちになりました。今、毎日カスピ海ヨーグルトを作っているのですが、今日は食事の後、この塩を入れたヨーグルトを食べてみてください。

塩というのは、人間にとってとても大切なものです。

古代ローマ帝国では、『塩貨幣』（サラリウム・アルゲントウム）と称して、当時貴重品であった塩を兵士達に給料として支給していたこともあったようです。英語の給料（サラリー）の語源も、これに由来しています。英語で塩のことをソルト（salt）というのは、そのためでしょう。

このような、人間にとって欠かすことのできない塩にたとえて、わたしたちクリスチャンは大切な役割を帯びている、ということをお今日の福音書から、学ぶ必要があると思います。

13節の塩の部分を読み全部読んでみましょう。

『あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。』

塩であるわたしたちが、周りのものを、清めたり、腐らないように働きかけたり、周りに味をつけたりする、何か影響を与える働きがなければ、存在する意味がない、ということでしょう。それでは、どんな働きが具体的にあるのでしょうか。

私は宗像に居る時、2か月に1回映画の集まりを企画していました。日本映画で、有名な黒澤明監督が作った「生きる」という現代劇をしたこともありました。現代と言っても、昭和27年という、まだ高度経済成長期に入っていない、貧しい時代の話です。実は、この「生きる」という映画のことを、「あなたがたは地の塩である」というテーマで、ある説教集に紹介されていたのですが、いい映画なので、紹介を兼ねて、例に挙げて説明します。

この映画は、1952年と言いますから、今から65年も前の、白黒映画です。主人公は、市役所の市民課の課長をしている、渡辺勘治という人物。定年をあと少しで迎える、平凡なサラリーマンです。しかし、体調が悪くなって、自分は胃がんで余命半年であることを知ります。彼は深い悲しみに沈んでしまいます。ところが、彼の部下だった小田切とよさんという若い女性は、市役所の仕事を退職して、今は別の仕事に就いているのです。

渡辺課長が、偶然この小田切とよさんに出会うのです。彼女は役所の単調な事務職をやめて、ゼンマイ仕掛けのおもちゃを作る小さな町工場で働き始めていました。渡辺課長は、彼女がとても生き生きとして、輝いている姿に驚きます。彼女の明るさはどこから来るのか、渡辺課長にはそれが不思議で、自分にもそのような力がほしい、それを分けてほしいと思うのです。

というのは、この主人公渡辺課長は、30年間市役所で働いているのですが、単調な事務職で、小田切さんは1年半で辞めたのに、何の生き甲斐も感じないまま、市役所に勤めているのです。市役所の仕事が悪い、というわけではありません。ただ、小田切さんは、そこを辞めて新しい仕事で、喜んで働いている。しかし、渡辺課長は、自分の仕事に生きがいを見出せず、自分のことを、塩気がなくなった、役に立たない塩のように感じてしまっているのです。

そこで、渡辺課長は、どうやったら、彼女のようにになれるのか、質問するわけです。その返事に困った小田切さんは、彼女が作ったオモチャの兎を見せるのです。そして、言います。

「わたしはただ毎日こんなものを作っているだけよ。でも楽しいわよ。これを作り始めてから日本中の赤ん坊と仲良しになったような気がする。」人のために役立つ仕事をしていれば楽しい、というわけでしょう。

これを聞いた渡辺課長は、目が開かれました。しばらく無断欠勤していた職場に戻り、これまでほったらかしにしていた、市民の陳情書にある、ひとつのプロジェクトに取り組みます。それは、下町の汚いドブを埋め立てて小さな公園を作る、という計画でした。いろんな抵抗がありました。多くの困難に遭うのですが、それをものともせず、渡辺課長はとうとう公園を完成させ、充実した気持ちでその生涯を閉じるというお話です。

若い小田切さんという女性の、純粹無垢に生きるその姿が、余命半年という、どん底の暗やみの中に居た渡辺課長に、生きる勇気を与えて、立ち上がらせたのです。

わたしたちに地の塩としての働きをイエス様から求められているのは、何も人々をアッと驚かせるような大事業をすることではありません。自分の行う小さな仕事で、人々を幸福にする、という手ごたえがあることだろうと思います。それが、人々に喜びを与える地の塩の働きなのでしょう。そのような喜びを持った生活を目指したいと思います。